

令和元年6月14日現在

機関番号：37406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26381294

研究課題名(和文) 幼児・児童を対象とした日本美術鑑賞教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the program of the appreciation education about the Japanese art for an infant and a child

研究代表者

犬童 昭久 (INDO, AKIHISA)

九州ルーテル学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：40720868

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本美術をテーマとする幼児・児童を対象とした鑑賞教育プログラムを作成し、協力園(所)・協力校における実践を通して鑑賞教育のための指導・支援法をまとめた。併せて実践成果をまとめた鑑賞教材の貸出等を通して教育普及を行った。上記の活動を通して、充実した日本美術の鑑賞授業を可能にすると共に、将来にわたって美術を愛好する態度や郷土愛を育くむことにつなげる一助とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼児期からの日本美術鑑賞学習が可能となることで、より深く将来にわたって美術を愛好する態度を育てることにつなげることができる。日本の歴史や文化に興味を持ち、芸術文化を愛好する心情が育つことは異文化に対する理解を深め、異なる文化をもつ人々と協調していく態度を育てることにもつながる。日本美術、並びに地域ゆかりの美術を取り上げることで地域の美術館と学校とが共通のテーマの下で連携を密にすることができる。保育所・幼稚園等と小学校において共通のテーマの下で活動することは、保幼小連携の一助になる。一連の活動は地域の観光資源を活用することにもなるので地域の活性化につなげることが期待できる。

研究成果の概要(英文)：The results of research are as follows. I made the appreciation educational program for an infant, the children who featured the theme of Japanese art and gathered up the instruction, support method for appreciation education through practice in the cooperation kindergarten (nursery school), the cooperation school. I educated you through the rental of appreciation teaching materials which settled practice result and spread afterwards. Through the activity mentioned above, I enabled an appreciation class of the substantial Japanese art in schools and connected it with a manner and regionalism to love art for the future.

研究分野：美術教育

キーワード：幼児 児童 鑑賞 日本美術

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本の伝統文化を理解し大切にすることを教育は従来、日常生活の具体的な時と場に即して行われてきたものである。しかし、伝統文化に関わる後継者不足も影響し、年々時代の変化と共に家庭や地域社会において子ども達が伝統文化について理解したり経験したりする機会は減りつつある。一方で国際化が益々進展する中において子ども達が国際社会に貢献し、世界の人々から信頼される日本人となるためには異文化に対する理解を深め、異なる文化をもつ人々と協調していく態度を育てる必要性が高まっている。そのような背景から学習指導要領には「伝統文化に関する教育の充実」の内容が盛り込まれ、子ども達の興味関心も高まっている。上記の状況の中において、幼児・児童を対象とする日本美術を主題とした美術鑑賞の実践例は豊富とはいえない状況にあり、これは教材不足や指導法が十分に解明されていないことが理由であると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究は、幼児・児童を対象とした鑑賞のための日本美術の作品と様式を選定した教材及び鑑賞教育プログラムを開発して協力園(所)・協力校で実践し、その教育的有効性を明らかにするものである。まず、幼稚園・保育所等と小学校並びに美術館等の実態調査を行い、課題を明らかにする。その上で日本美術をテーマとする幼児・児童を対象とした鑑賞教育プログラムを作成し、協力園(所)・協力校における実践を通して鑑賞教育のための指導・支援法を検討する。その後、実践成果をまとめた鑑賞教材の貸出等を通して教育普及を行う。上記を通して、学校等での充実した日本美術の鑑賞の活動を可能にすると共に、将来にわたって美術を愛好する態度や郷土愛を育くむことにつなげる。

### 3. 研究の方法

本研究では次の四つのことを明らかにする。

- (1) 「鑑賞教育において日本美術を取り上げることの必要性」
- (2) 「幼児期における鑑賞の活動の方向性」
- (3) 「幼児・児童期における日本美術鑑賞学習の可能性」
- (4) 「日本美術鑑賞教育プログラムの教育的有効性」

主な研究方法は下記のとおりである。

- (1) 幼稚園・保育所等と小学校における日本美術をテーマとした授業が行われている現状を調査することで、日本美術の各分野における実践内容と課題について明らかにする。
- (2) 日本美術を取り扱う美術館等の鑑賞教材の現状、学校との連携の状況を調査することで現在の傾向を把握する。
- (3) 調査結果から、事例と鑑賞教育指導法等をまとめ、教材と鑑賞教育プログラムを作成する。
- (4) 開発したプログラムを協力園(所)・協力校で行うことで、実際をとらえ返す。
- (5) 作成した鑑賞教材の貸出等を行い、本プログラムの教育的有効性を明らかにする。
- (6) 本研究の成果報告として関係のシンポジウムに参加し、パネルディスカッション等を通じて、研究成果を報告する。

### 4. 研究成果

- (1) 「鑑賞教育において日本美術を取り上げることの必要性」

日本美術鑑賞学習の現状と課題について、国や県による施策を確認しながら教育現場における現況を把握し、日本の伝統文化を取り上げた事例を基に日本美術の系統性や構造を把握した。

また、国内外の関連した文献等から本研究に援用できる内容の考察を行うものとして、主に日本と米国の保育・図画工作科関連の教科書等を収集し、日米の教科書における日本美術に関する取り扱いについて調査を行った。併せて造形表現・図画工作科関連ウェブページの調査を実施した。

また、現地視察や取り寄せた資料を通して幼稚園・保育所等や小学校における日本美術をテーマとした活動が行われている状況、並びに日本美術を取り扱う美術館等の鑑賞教材の状況、併せて学校との連携の状況を把握した。調査結果から、国内における幼児・児童を対象とする日本美術鑑賞学習の実践例は豊富とはいえない実態を把握し、教材不足や指導・支援法が十分に解明されていないことが理由であると結論付けることができた。上記の内容を踏まえ鑑賞教育において日本美術を取り上げる必要性があることを確認することができた。

- (2) 「幼児期における鑑賞の活動の方向性」

幼児期から児童期への学びの接続に着目して、幼児教育における「造形的な表現活動」の取組の観点から、児童期の学びの素地として育むべき幼児期の資質・能力について確認し、レジヨ・アプローチの事例等も参考にしながら、我が国の教育現場における幼児期の鑑賞の活動の方向性を探った。

鑑賞の活動は美術の知識獲得だけにとどまらず、制作などの体験も合わせて行うことでより質

を増す。その学習は鑑賞の活動だけで成立するものではなく、表現と鑑賞が連続した活動を経て、深まっていく。したがって美術鑑賞の学習とは、鑑賞と表現が一体化した活動であるとして捉えることができる。また、幼児期の子どもは「遊び」を通して身体感覚を豊かにし、人やものやこと(事象)とのつながりを深めながら自己の世界を拡大し、自ら発達していく。幼児期の子どもは、本来好奇心に満ち冒険や挑戦が大好きで、新規なもの・達成感が得られるものに対して意欲をもつ。「遊び」の中では探索や試行錯誤が自由にできるので評価や結果にとらわれずにさまざまなことにチャレンジすることができ、心身の発達が促されること等を協力園(所)等における取り組みから確認することができた。

また、現行の小学校・幼稚園・保育所等における教育内容を基に活動のねらいや目的を「遊び」「色」「形」「イメージ」の観点から整理し、上述を踏まえ、取り組みの方向性として次のことをあげた。

一点目は幼児期から美術(Art)の世界に親しむことと美術(Art)は生活と結びついていることを意識して実践が行われていくことである。二点目は幼児の興味・言葉・姿から構想し、その活動の中核に「幸福」「創造性」「楽しみ」を据え、身体感覚を働かせながら子どもの主体的な生活や遊びが展開する活動を行っていくことである。そのためにも幼児期に育まれた資質・能力が児童期の図画工作科の活動のみならず教育全般において活かされ、その後も学びが接続し、継続していくことが重要であるといえる。

### (3)「幼児・児童期における日本美術鑑賞学習の可能性」

現行の小学校教育内容においては日本美術に関する鑑賞の活動は、児童期における小学校高学年において取り組まれているが、幼児期から鑑賞の活動に取り組むことで、その後の取り組みでは、更に学びの質が深まるのではないかという仮説を立てた。その上で幼児期と児童期における日本美術鑑賞学習において子どもたちが何を学び、指導者・保育者はどのような力を子どもたちに育成するのかについて課題や論点を整理した。併せて日本美術の系統性や構造から「遊び」「色」「形」「イメージ」を照らし合わせながら日本美術鑑賞教育プログラムのテーマ設定や活動内容の策定を行った。

具体的な内容は次のとおりである。発達段階表を作成し、それを基に現行の小学校・幼稚園・保育所等における教育内容を基に活動のねらいや目的を整理した。重要な点として身体感覚を働かせることを中核に据え、活動においては結果や作品主義ではなくプロセスを重視すると共に生活と表現・鑑賞をつなげることをあげた。その際には子どもたちひとりひとりの思い(主体性)を大切にすると共に優劣を問わず多様性を肯定することをあげた。

特に幼児期においては「色」「形」「物語性」に関することが基礎となり、色がきれい、形がおもしろいこと等に気づかせると共に世界には様々な表現があり、それぞれに魅力があることも気づかせること等をあげた。

なお、教材研究は常に子どもの視点から考え、題材選びも大人のイメージ中心に考えるのではなく、「生活感を感じられる作品」、「自分につなげて見ることができる作品」、「物語・お話がイメージしやすい作品」などを確認し、幼児期の発達段階に留意して取り組むものとした。

加えて保幼小連携の観点から学びを繋げていくためにも、幼児期に鑑賞の活動の素地をつくるのが大事であり、上記の活動を通して、その後の取り組みでは鑑賞の活動の学びにおける質が深まる様子を協力園(所)等で窺うことができ、日本美術鑑賞学習の可能性を確認することができた。

### (4)「日本美術鑑賞教育プログラムの教育的有効性」

日本美術を鑑賞するには作品の背景をイメージする力が必要となる。鑑賞教材を用いることと併せて美術館等での鑑賞の活動も行えば、子どもたちにとって日本美術の鑑賞学習はもっと魅力あふれるものになる。その考えを基に鑑賞指導・支援法をまとめた資料、ワークシート、教示用図版等の鑑賞教材セットとして作成し、協力校・協力園(所)において実践を行った。取り組みでは「しる」「ふかめる」「共有する」ことを基本の形として取り組んだ。

対象が幼児の場合は発達の特性から作者や作風に関することを中心に取り上げるのではなく、伝統模様や伝統色等に注目して「鑑賞遊び(鑑賞 造形表現 鑑賞)」を中心に行うものとした。

【保育園等の実践事例：「みて鑑賞遊び」「さわって鑑賞遊び」】

また、対象が児童の場合は対話型鑑賞法を基に取り組むものとした。【小学校の実践事例：「鬼瓦の鑑賞」等】

小学校の実践では、子どもの身近な生活や地域にある日用品、美術品、建造物などから、共通に見られる表現の特質などに気付かせることに重点を置いた。現代にあるもので類似するものをあげさせ、仕組み、用途や材質を比較した。ある程度の意見が出たら、屏風や掛物のように「見て楽しむもの」、絵巻物など「読んで楽しむもの」、茶道具、武具、信仰の道具など、当時どのように使用されていたか等について、理解できるように複製品やパネル等を交えながら、できるだけわかりやすく話すこととした。併せて「どんな人が描いた(作った)のだろうか?」「どんな場所にあったのだろうか?」「どんな場面で使われたのだろうか?」等、実際にそれを使用していた人に関する話等もしながら、現代と過去の感覚の違いや共通点を見つけることを行った。

また、描かれている(作られている)ものを詳細に観察し、そこに表現されている主題について考えた。具体物が描かれていない場合は、「色」「形」に注目し、季節や行事等も巧みに表現されていることに気づくこともねらって取り組んだ。

なお、上記を行うためには指導者・支援者は、鑑賞の活動から何を引き出し、何につなげていくかについて明確化する必要がある。可能であれば、美術館等にも出向き、本物と出会う体験を演出し、印象付けて、将来的には美術のみならず歴史や文学などの学習の深まりにつなげていくことも大事であることを確認した。

現代では、美術教育そのものが生活やその時代の思想と結びつき、人間性陶冶につながるという考えが忘れられつつあるのではないかと感じることもある。それは美術が人々の生活と密接に結びついているという感覚の希薄化が原因のひとつであるように思われる。美術とは自身の生まれた時代や地域、生活とも連なっている。そのような視点を持って美術と関わることでものの「見方・考え方」が揺さぶられ、これまでと違った新しい生き方に気づいたり、豊かな人生を送ることにつながったりすることもできる。

近年の例として、地域の神社・仏閣等が自然災害で破損し、以前のように「写生大会」や「遠足」を行うことができなくなった幼稚園や小学校等では、当たり前にあることのありがたさや、かけがえのなさについて幼児・児童が気づき、地域で大切にされてきた文化財や、それに関連する日本伝統の造形文化や美術作品に興味・関心を持つ子が増えていることを確認できた。幼児・児童が自らの生活を振り返り、気づくことが自分の作品と自分の国の文化が生みだした作品とを結びつけて、美術作品を大切にしようとする幼児・児童の意識づけにつながったものと考えられる。そのことから美術教育が担っている役割は大きいと結論づけることができる。また、異文化理解や国際理解についても、諸外国の文化に感化されることだけを意味するのではなく、自国の文化も理解し継承し大切にするとすればこそ、真の意味での理解につながるものと考えられる。そのことから自分たちの国の美術を見直し、古今東西の美術にも関心を持って自分の表現に生かす美術教育は大切であり、その一環を担う日本美術を取り上げた鑑賞の活動は重要であるといえる。

なお、一連の活動を通じた教育的有効性は次のとおりである。

学校等での充実した日本美術の鑑賞の活動が可能となる。

鑑賞の活動が充実することで将来にわたって美術を愛好する態度を育てることにつながる。

日本の歴史や文化に興味を持ってもらい、芸術文化を愛好する心情が育つことは異文化に対する理解を深め異なる文化をもつ人々と協調していく態度を育てることにもつながる。

日本美術、並びに地域ゆかりの美術品を取り上げることで地域の美術館等と学校とが共通のテーマの下で連携を密にすることができる。

幼稚園・保育所等と小学校において共通のテーマの下で活動することは、学びの接続を考慮した保幼小連携の一助になる。

一連の活動は地域の観光資源を活用することにもなるので、地域の活性化にもつなげることが期待できる。

一連の活動を通して、将来的に地域の教育資源を活用した効果的な学習の場の創出が可能となる。

上記の内容を「研究成果報告書」(私家版)にまとめた。

以上が成果であるが、研究期間中に熊本地震に見舞われたために一部の研究が滞り、現在も進行しているところもある。これについては、今後も成果がまとまり次第、公表をしていく予定である。今後も、この研究の成果の普及を推進すると共に教育的有効性について検証し、客観的なエビデンスを積み上げていく努力をしていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

犬童昭久、「幼児期における鑑賞の活動の方向性を探る -図画工作科の活動へつなげるために-」、「未来をひらく美術教育 -新たな鑑賞教育プログラムの実践と評価-」、熊本大学研究報告書、査読無、2018、pp.35-42

犬童昭久、「造形的な表現と鑑賞の活動に関する試論的考察」、九州ルーテル学院大学研究紀要 VISIO、査読無、47巻、2017、pp.99-108

犬童昭久、「日本美術鑑賞学習の現状と課題」、九州ルーテル学院大学研究紀要 VISIO、査読無、47巻、2017、pp.109-115

〔学会発表〕(計1件)

犬童昭久、「幼児・児童を対象とした日本美術鑑賞学習の現状と課題」、鑑賞教育シンポジウム「美術鑑賞という行為について考える」、2015年11月21日、熊本大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

犬童昭久 ( INDO, AKIHISA )

九州ルーテル学院大学・人文学部・准教授研究者番号 : 40720868

### (2)研究分担者

無

### (3)研究協力者

東奈美子 ( HIGASHI , NAMIKO )

熊本市立健軍小学校教諭